

トマス・アクィナスにおけるアナロギアと比喩¹⁾

内山 真 莉 子

序

トマス・アクィナスにおいて、アナロギア (analogia) 的な言語使用は、以下のような仕方で説明される。或る一つの名が複数のものどもに使用されるとき、そのものどもの中でより先なるものが一つあり、それがその他の全てのものの説明内容の中に含まれることがある。例えば「健康」という名は、薬においては「動物の健康を作り出す」限りで語られ、尿においては「動物の健康を表す」限りで語られる。ここで、薬と尿どちらの説明内容の中にも動物が含まれることから、動物はそれらよりもより先なるものであることになる。このように、複数のものどもにおいて先後関係が認められ、さらにその関係のゆえに一つの名が共有されているとき、その名はアナロギア的に使用されると言われる。

ところでトマスにおいて、厳密な仕方をとるならば、このようなアナロギア的な言語使用の下位区分として分けて定義し得るものがある。それは比喩 (metaphora) である。比喩はアナロギア的な言語使用の一種であり、多くは神について聖書などで象徴的に語られる事柄について用いられる (神は獅子である、は比喩的な言語使用の一例である)。そうした「神について語るという場面」において、比喩と狭義のアナロギア²⁾を厳密に区別する際、その根拠となるものは不完全性である³⁾。神につ

1) 本稿では metaphora の訳語として「比喩」を用いているが、以下で扱う限りでは、実質的には全て「隠喩」であることを付言しておく。

2) 以下で用いる「アナロギア」は全て比喩を含まない狭義のアナロギアを指すものとする。

3) Cf. Thomas, *Summa Theologiae*, I, q. 13, a. 3, co. 「或る名は神から被造物へと発出するこうした完全性を、神の完全性が被造物によって分有されることによる不完全な様態自体

いて比喩的に使用される名は、その名の表示内容に不完全性を含意している。実際、先に挙げた「獅子」は被造物に固有の名であり、それが物體的被造物の本性に関わる限りで何らかの物體的条件を含み、ゆえに不完全性を含意している。他方で神についてアナログ的に使用される名は、不完全性を含んでいない。例えば「善」という名は被造物に対して使用することも出来るが、あらゆる被造の善に卓越した仕方で先立つ神について、本来的にはより先に使用するものである。つまり「善」はその表示内容に関しては神に固有に使用されるのであり、その際には不完全性は当然含まれない。「獅子」は、まさに被造物であるライオンという動物に固有の不完全性を含意する名であり、「善」は表示内容としては神に固有であり不完全性は含意されないという、こうした区別の基準は一見明快であるように思われる。

しかしアナログは神について語るためだけに使用される訳ではない。先述の動物に固有に語られる「健康」も、アナログ的言語使用の一例としてトマスがよく用いるものである。その場合、「健康」が述語付けられるいずれもが被造物であるため、先のような不完全性の含意の有無は区別の基準として最早有効ではない。では何故「健康」は、アナログ的とされるのであって、比喩的ではないのか。

以上の検討を踏まえ、本稿では被造物への述語付けに限った場合に、アナログ的言語使用から比喩的言語使用はどのようにして区別されるのか、その基準についてトマスのテキストを整理することで、明白な仕方で提示することを試みる。実際、この区別については先行研究において検討されてきてはいるが、その多くが神について語る場合に焦点を当てながら説明している⁴⁾。しかし本来的にはアナログとは比例関係を

が、その名の意味表示において含まれるという仕方によって意味表示する。例えば「石」は何らかの質料的な仕方で在るものを意味表示し、こうした名は比喩的にでなければ神に帰され得ない。」なお、トマスの著作の引用に関して、『神学大全』および『命題論注解』はレオニナ版、『命題集注解』はムース版を用いている。

4) Cf. Ralph McInerny, "Metaphor and analogy", *Aquinas and Analogy*, Washington D. C., The Catholic University of America Press, 1996, pp. 116-136; James F. Ross, "Analogy as a rule of meaning for religious language", Anthony Kenny (ed.), *Aquinas. Modern Studies in Philosophy*, London, Palgrave Macmillan, 1969, pp. 93-138; George P. Klubertanz, *St. Thomas Aquinas on Analogy, A Textual Analysis and Systematic Synthesis*, Chicago, Loyola University Press, 1960. この中の McInerny の解釈に対し筆者はほぼ同意する立場であるが、

表す語であり、トマスが援用した元であろうアリストテレスにおいては、当然神に述語付ける方法論としては想定されていない⁵⁾。それゆえ、もしトマスにおいて整合的な言語使用に関する体系があるとするならば、アナロギア的言語使用と比喩的言語使用は、神に関する言明以外の場面でも適切に区別されていなければならない。それを検討するのが本稿の主要な目的であり、トマスにおける言語使用の体系的統一の有無を考察する上での一助となることを期する。

1. 問題の整理

1.1 アナロギアと比喩——神の場合

先ずは、神において何らかの名がアナロギア的に語られるということがどのように説明されているのかを確認する。

複数のものどもについてアナロギア的に語られる全ての名は、それら全てが一つのものへの関係によって語られている必要があり、それゆえにかのの一つのものは全ての名の定義のうちに置かれるのでなければならない。……

しかし、このような名（「善」のように比喩的に語られるのではない名）は神について原因的のみならず本質的にも語られることが先に示されていた。というのも、「神は善である」ないし「神は知者である」と語られるとき、神が知恵や善性の原因であるということだけが表示されているのではなく、神においてそれらがより卓越した仕方で先在していることをも表示しているからである。それゆえ、こうしたことの限りで、名によって表示された事物に関しては、被造物についてよりも神についてより先に語られるのだと言われなければならない。何故なら、そうした諸々の完全性は神から被造物

結論に至るまでに神に対する比喩をも同じように扱っている。本稿は神と被造物に対する述語付けをプロセスとして一旦切り分けて考えてみることを試み、比喩とアナロギアの区別の基準が純粹に被造物に関する記述のみからも構築し得るかを検討し、一般的な形として取り出すことを目的としている。

5) アナロギアに関するトマスとアリストテレスとの関係は以下を参照のこと。井澤清「トマス・アクィナスにおけるアナロギア論とカエタヌス」、『中世思想研究』第40号、1998年9月、pp. 37-54; McInerny (1996).

へと流出しているのであるから⁶⁾。

先ずはアナログ的に語られるという事態全て（その下位区分である比喩も含まれる）に当てはまる前提として、何らかの一つのものへの関係を有する限りで名を共有しているのでなければならない、と説明されている。これは言わばアナログ的に語るという行為の大原則とも言い得るものであろう。

そして善や知者などの名は被造物のみならず神にも語られ得る名であり、その限りでそれらはアナログ的に語られているとされ、さらにその名によって表示された内容に関しては神により先に当てはまるものとして語られることになる。実際、被造物においても善や知者であることなどは有意味に語られるのであるが、そうした被造の善や知恵は全て神から流出したものであるので、根源的には神において先在していたと理解されるべきであるからだ。

他方で、比喩的に語られる場合はこれとは区別された事態として説明されている。比喩的に語られる場合も、先の大原則である「一つのものへの関係を有する」という形式は有している。その上で、トマスは以下のように述べる。

それゆえこのようにして、神について比喩的に語られる全ての名は、神についてよりも被造物についてより先に語られる。何故なら、神について語られたそうした名は、こうした被造物に対する類似性のみを表示しているからである。例えば、……神について語られる「獅子」という名も、獅子が自らの働きにおいてそうするように、神も自らの業において力強く働くようにしているということのみを表示している。そしてこのように、これらの名の表示は、神について語られる限りでは定義され得ず、ただ被造物について語られることによるのみ定義され得るということは明らかである⁷⁾。

6) Thomas, *Summa Theologiae*, I, q. 13, a. 6, co.

7) *Ibid.*

先のアナログア的に語られる名との最大の相違は、その名の表示内容がより先には被造物に当てはまる、ということである。被造物により先に当てはまる名が、神の本性を表示し得るということはあり得ない。それゆえに、そうした名は神については比喩的に語られるとされなくてはならないのである。

1.2 アナログアと比喩——被造物の場合

以上のように、神についてアナログア的に語られる場合と比喩的に語られる場合とを区別する基準は、比較的明瞭だと言い得るだろう。では、被造物の中ではそれらはどのように区別されるのか。まずは被造物においてアナログア的に語られる名としてよく取り上げられる「健康」を例にとって検討してみよう。

名において、このこと（アナログア的に語られるということ）は二通りに生じる。一つは、多くのものが一つのものに比を有することによってであり、例えば「健康」は薬と尿について語られるが、それは両者が動物の健康に対して、尿は徴として、薬は原因としてという秩序や比を有している限りでのことである。もう一つは、一方が他方への比を有することによってであり、例えば「健康」は薬と動物について語られ、それは薬が動物のうちにある健康性の原因である限りでのことである⁸⁾。

アナログア的に語られることが二通りに分けて語られているが、そのどちらでも「健康」は語り得る。つまりは、何らか一つのもの、ここでは動物の健康性であるが、それへの関係を有するがゆえに、その他のものども、すなわち薬や尿も「健康」であると語られることが出来るのである⁹⁾。

他方で、比喩的に語られる場合は以下のように言われている。

8) Thomas, *Summa Theologiae*, I, q. 13, a. 5, co.

9) トマスはアナログア的に語ることを二通りに分けて説明しているが、それは神について語るアナログアを厳密に分けるためのものであり、本稿では議論が煩雑になることを防ぐために「何らか一つのものへの関係を有すること」とまとめた。

例えば草原について語られた「笑う」は、比の類似に即して、人間が笑うときに美しいように、同様にして草原が花咲くときに美しいことだけを表示する¹⁰⁾。

「草原が笑っている」とは比喩的な表現であり、人間が笑うと美しいことと、草原が花咲くと美しいことが類似関係にあるがゆえに語られている。すなわち「人間の笑いの美しさ」という一つのものに対する関係性があり、その秩序（比の類似¹¹⁾）に基づき草原も「笑う」と言われているのだから、比喩的な語りも「何らかの一つのものへの関係を有する限りで名を共有する」というアナログ的な言語使用の大原則に従っている。

しかし、何故草原についての「笑う」は比喩的であり、「健康」はアナログ的なのか、ということについてはこの箇所からだけでは判然としない。では「健康」はどのようにして比喩的ではない、と言い得るのであろうか。以下にて、比喩的な言語使用の条件を詳細に確認することで考察を進めていきたい。

2. 比喩的な言語使用の条件

2.1 一つのものへの類似関係

ここでは、被造物に限った形で、比喩的に語られることについて説明されている箇所を抜粋し、比喩的な言語使用の条件を洗い出していく。先ず着目するのが「類似 (similitudo)」である。

先述の正義の正直^{せいちよく}さは、魂の健全さと魂の新しさと比喩的に言われる。というのも、健全さは身体の部分における然るべき協約性をもたらすのに対し、新しさは高潔さと徳と美しさを有しているからである。こうした全てのことから、正義と言われる魂の諸能力の

10) Thomas, *Summa Theologiae*, I, q. 13, a. 6, co.

11) アリストテレスは『詩学』(1457b6)において比喩を「(a)類から種への適用, (b)種から類への適用, (c)種から種への適用, あるいは, (d)類比関係にもとづく適用」(『アリストテレス全集 18』所収, 朴一功訳, 岩波書店, 2017年, p. 549)と分類している。しかしこの箇所でもトマスは「比の類似に即して」と述べていることから、アナログ的(つまり類比的)用法の中の比喩に限定していると思われる。

正直さはこれら全てを類似を通じて含んでいるということが明らかである¹²⁾。

この箇所からは、何らかの事物が類似を通じて或るものを含むことで、その或るものに関する名がその事物に比喩的に語られ得る、という比喩的な語りの構造の一端が窺える。正義という魂の正直さにおいて健全さと新しさに関する類似性が見出されるがゆえに、それは健全である、ないし新しいと比喩的に言われることが出来るのである。こうした類似関係については、さらに以下のようにも述べられている。

比喩的に語られる諸々の事柄においては、多様な類似に即して同じものが多様なものへと帰されることは全く妨げられない。この事に即して、自分自身に属するものだけでなく他者に属するものをも癒すように、愛する者の情動が他者へと延長される限りで、何らかのそうした延長の性格によって拡大は愛に関わっている¹³⁾。

ここで着目したいのは、比喩における類似の仕方自体は一通りでなくともよい、ということである。つまり比喩的に語られる名は、多様な類似に即して多様なものに語られることが出来る。それらがどのような仕方でも類似していると言い得るかは事物によって異なるのだが、総じて或る一つのものへの類似関係を有しているという限りで、同じ名が比喩的に複数のものどもに語られることになるのである。

ところでこうした類似とは、形相に基づくものであることには留意されたい。実際、トマスは類似性について説明する際「類似性は形相における合致ないし共通性に即して認められる¹⁴⁾」と述べている。すなわち、比喩的に或る一つの語が述語付けられているものどもは、何らかの仕方でもその或る一つの語に対する形相的な合致ないし共通性を有しているということになるのである。

以上から、「何らかの仕方でも或る一つのものへの形相的類似関係を有

12) Thomas, *In IV Sententiarum*, d. 17, q. 1, a. 1, qc. 3, co.

13) Thomas, *Summa Theologiae*, I-II, q. 33, a. 1, ad 1.

14) Thomas, *Summa Theologiae*, I, q. 4, a. 3, co.

していること」を比喩的な言語使用の条件の一つ目としたい。

2.2 名と名が表示するもの

比喩的な言語使用の条件の一つ目を「一つのものに対する形相的類似関係」に求めたが、それとは別の条件について、以下にて検討する。

悲しみが人間を飲み込むと言われるのは、悲しみをなす悪の力が完全に魂を弱らせ、結果として悪を避けるあらゆる希望を排除するような際のことである。そしてこのようにして、同じ仕方で（悲しみは）重くし、飲み込みもする。というのも、固有性に即して受け取られるならば、自らに背馳すると思われるような諸々のものが、比喩的に語られる事柄においてはそれに随伴するからである¹⁵⁾。

これは異論解答としてトマスが悲しみの作用を解説している箇所であるが、何らかのものが比喩的に語られる際の特徴について着目すべき点がある。すなわち、何らかの名が或る事物に対して比喩的に語られる場合、その名がその事物にとっては「固有性 (proprietas)」に背馳する、すなわち固有ではない内容となることがあり得る、ということである。それゆえ悲しみは人を飲み込みもするし、（飲み込めば本来は重くさせないはずだが）重くもすると語り得るのである。ところで、この固有性に即して受け取られる、背馳するとは一体どういったことであるのか。これに関して、トマスは別の箇所で以下のように述べている。

或る名は二通りに共有可能であり得、一つは固有にであり、他方は類似によってである。固有に共有可能な名は、名の全体的な表示に即して多くのものに共有可能なものである。他方で類似によって共有可能な名は、名の表示の中に含まれているもののうちの何らかのものに即して共有可能なものである。実際この「獅子」という名は、「獅子」という名が表示する本性が見出される全てのものに固有に共有される一方で、勇敢さや強さといった獅子に属する何らか

15) Thomas, *Summa Theologiae*, I-II, q. 37, a. 2, ad 3.

のものを分有するものには類似によって共有可能であり，そうしたもののどもは比喩的に「獅子」と言われる¹⁶⁾。

或る名が固有に共有されるとは，例に即して言えば「獅子」という名が，獅子の本性を有する全てのものに当てはまるということである。即ち，名が固有に共有されるとは，名の表示する本性と対象が有する本性が同一である場合を指している。

他方で固有に共有されるのではない場合，名が固有に表示する本性を有する対象の何らかの性質を分有する（participare）ものどもによって，名が共有される。例に即して言えば，「獅子」という名が固有に表示する本性を有する対象（獅子）の附帯性である「勇敢さ」を分有する或る人物も，類似によって「獅子」と言われ得る，ということである。そしてこれが比喩的な名付けだとされている。確かに，人間の本性と獅子のような動物の本性は，理性的動物と非理性的動物といったように互いに排反している。しかし附帯性に限るならば，獅子と同じ附帯性を人間が有することはあり得ることである。一種の分有に即しつつ固有性に背馳する名が述語付けされる際に，比喩的な語りとなるのである。

このように理解すると，比喩的な言語使用のもう一つの特徴を明らかにすることが出来る。すなわち，名と名の表示内容の間に本性に即した合致が見られない場合が比喩的な語りである，というものである。引用文の例に即すと，「獅子」という名を獅子に付与する際は，その「獅子」という名は獅子の本性である「ネコ科の大型な非理性的動物」を表示しており，名と名の表示内容は本性に即して合致している。しかしながら「獅子」という名を人間に付与する際には，その「獅子」という名は「勇敢さ」のみを表示しているのでなければならない。何故なら獅子の本性を表示しているのでは，人間に付与することは出来ないからである。つまり後者のような語り方の場合，「獅子」という名が表示する内容に獅子の本性は含まれていない，ということになる。あくまでも「勇敢さ」は獅子にとっては附帯性であり，そうした部分的な類似関係ないし分有があるのみだからである。こうした事態を指して，名が事物の固有

16) Thomas, *Summa Theologiae*, I, q. 13, a. 9, co.

性に背馳することがあり得るとされているのである。よって「述語付けられている名が表示する内容に、その名自体もしくは名が表示する本性的内容が含まれていないこと¹⁷⁾」を比喩的な言語使用の条件の二つ目としたい。

2.3 比喩的に語られるという事態の図式化

以上までで、被造物について語る際の比喩的な言語使用の条件を二つ洗い出した。一つは、「何らかの仕方で或る一つのものへの形相的類似関係を有していること」であり、もう一つは「述語付けられている名が表示する内容に、その名自体もしくは名が表示する本性的内容が含まれていないこと」である。この条件が揃うことで、或る名は何らかの対象に比喩的に使用されていると言い得ると考えられるが、さらにトマスにおける名と事物との表示関係を合わせて整理して、図式化してみたい¹⁸⁾。

トマスは「声も魂の受動の徴であり、さらに魂の受動は諸事物の類似性であると（アリストテレスは）述べる。これは、感覚ないし知性において存する事物自体の何らかの類似性によってでなければ事物は魂によって認識されないからである¹⁹⁾。」と述べ、そして魂の受動（*passio*）とは知性の懐念（*conceptio*）であると説明している²⁰⁾。すなわち、声である名は魂の受動として知性の懐念を表示し、さらに知性の懐念は事物の類似性であるため、当の事物の本質を表示する²¹⁾。よって、これら

17) 引用文では、こうした「名が表示する本性が含まれていない」、つまり部分的に附帯性が類似しているのみであることを、「何らかのものを分有する」と表現していると思われる。「分有」は存在論的にも用いられる語であるため、文意を明確にする意図も込めて、敢えて条件説明に使用することを避けた。

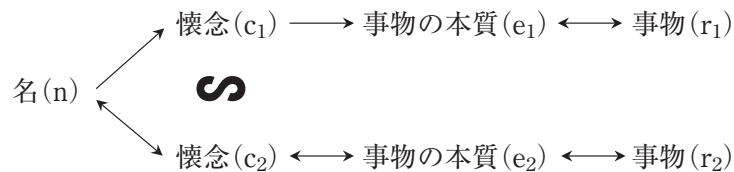
18) トマスのアナロギアや比喩などの言語使用に関わる議論においては、年代に応じて発展的に変化している、ないし統一の見解はないといった意見が多く見られる。Cf. Klubertanz (1960); Bernard Montagnes, *La doctrine de l'analogie de l'être d'après Saint Thomas D'Aquin*, Louvain, Publications Universitaires, 1963; Herbert McCabe, "Appendix 4, Analogy", *St Thomas Aquinas. Summa Theologiae*, vol. 3, London, Blackfriars, 1964, pp. 106-107; 芝元航平「トマス・アキナスにおけるアナロギア理解の発展について」、『中世思想研究』第47号, 2005年9月, pp. 37-52. しかしもしモデル作成が出来、それでトマスの議論を統一的に説明可能であるならば、整合的体系性があると主張し得るだろう。

19) Thomas, *In I Peryerm*, l. 2, 16a6, 196-201.

20) Thomas, *In I Peryerm*, l. 2, 16a3, 117.

21) Thomas, *Summa Theologiae*, I, q. 13, a. 1, co. 「この人間という名がその表示において、人間である限りでの人間の本質を表現するように。……何故なら、(人間という名が)

をまとめると『名 (nomen) → 知性の懐念 (conceptio) → 事物の本質 (essentia) → 事物 (res)』という表示関係があることになる。また、比喩的言語使用の条件の一つ目である類似関係は形相的であるので、知性の懐念のレベルで見出されると思われる。それゆえ、或る比喩的に用いられている名 (n) が二つの事物 (r_1, r_2) に述語付けられているということは、以下のように図式化出来るだろう。



矢印は名および懐念の表示関係の方向性を表しており、双方向の矢印は、その表示関係が本性的内容を含むものであることを意味する。或る名 (n) は二つの事物 (r_1, r_2) に述語付けられており、それぞれの何らかの本質 (e_1, e_2) に対応した懐念 (c_1, c_2) を表示している。そして (c_1) と (c_2) は何らかの形相的類似関係を有しているのだが、(n) は (r_2) から得られた懐念 (c_2) を本性的内容を含む仕方で表示する一方で、(r_1) から得られた懐念 (c_1) をそのように表示する訳ではない、ということになる。これが、或る名が比喩的に語られている際に生じている事態であるとする事が出来るだろう。

それでは以下にて実際の使用例に適切に当てはめ得るのかを確認したい。さらには、アナロギア的に語られている場合にも当てはめてみることで、被造物における比喩的言語使用とアナロギア的言語使用との間に生じる相違について明らかにしていく。

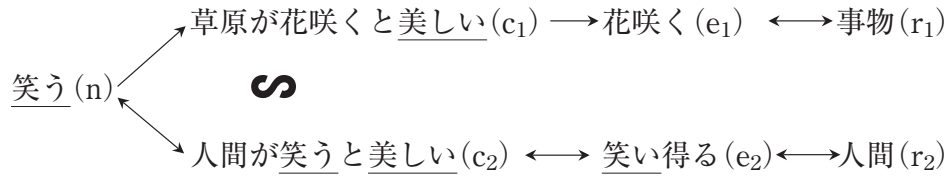
3. アナロギア的言語使用と比喩的言語使用

3.1 「笑う」

まずは、比喩的な表現とされたものについて、上記の図式が当てはまるかどうかを確認する。例として、先にも引用した「草原が笑う」を取り上げる。草原が「笑う」と語られるのは、人間が笑うと美しいように、

表示するのは、人間の本质を明らかにする人間の定義であるから。実際、名が表示する概念は定義である。」

草原も花咲くと美しいからであり，その形相的類似関係に基づき比喩的に名付けていたのであった。

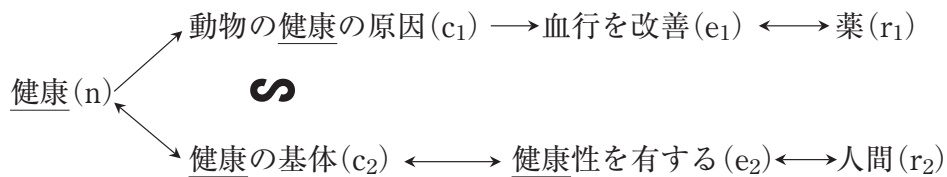


人間にとって何らかの本質に即した内容である「笑い得る」に対して，或る人が「美しい」と感じる際に，「人間は笑うと美しい」という懐念が得られる。そして「笑う」という名は，そうした人間の本質に即した内容を表示している。他方で，草原にとって何らかの本質に即した内容である「花咲く」に対して，或る人が「美しい」と感じる際に「草原は花咲くと美しい」という懐念が得られる。そして草原に対して述語付けられた「笑う」という名は正にこのことを表示しているのであるが，しかしながら「笑う」という名それ自体にとっては「草原が花咲くこと」は本性的内容ではない。それゆえ草原に対する「笑う」は，或る人の懐念における「美しい」という附帯性の類似関係に基づき人間から転用されたものであり，述語付けられている名が表示する内容（草原が花咲くと美しい）に「笑う」という名の本性的内容（笑う）が含まれていない。しかしながら両者の間には「美しい」という点での形相的類似関係は保持されている。よって，草原に対して「笑う」は，比喩的に用いられていると判断されるだろう。

3.2 「健康」

続いてアナログ的に語られる場合について検討したい。例として挙げるのは「健康」である。「健康」は，動物・薬・尿と複数の事柄についてアナログ的に語られる名である。動物は健康の基体であって，健康性を有するものであり，それに対し薬は動物の健康を原因するものという関係を有している。そしてその健康に対する関係のゆえに，「薬は健康である」と語られるのである（日本語の感覚としては違和感があるかもしれないが，サプリメントなどを指して「これは健康的である」と説明することは可能であろう）。では動物と薬を図式化してみよう。こ

ここでは、動物の血行を改善する効果を有する薬を例に挙げる。



比喩的な表現との相違点を確認するならば、名が二つの事物それぞれの懐念に含まれている、ということである。「健康」それ自体が動物の健全な状態を表す名であることから、動物に述語付けられる際は、名の表示内容（動物の健康）と事物の本質に即した内容（動物は健康の基体となる）は合致する。他方で薬に関しては、「動物の健康を原因する」という懐念は、薬にとっても「健康」という名にとっても本性的内容とは言えない。しかしながら、動物にとって血流が良くなることが何らかの身体的不調の解消に繋がることは客観的事実として認められるものであり、薬が有するそうした動物の健康への関係のゆえに、薬について「健康を原因する」という懐念が作られている。このようにして、「動物が健康である」および「薬が健康である」と語る際に、動物と薬それぞれの懐念に「健康」が含まれる。よってこの語り方は、或る一つのものへの関係に基づき行われているが、述語付けられている名が表示する内容のどちらにも、その名自体が含まれているので、比喩的ではないと判断されるのである。

結 語

本稿は、被造物に関する記述において、アナロギア的言語使用から比喩的言語使用はどのようにして区別されるのか、その基準についてトマスのテキストを整理することで、明白な仕方で提示することを目標としていた。それに対し、比喩的な言語使用の図式モデルを作成し、そのモデルを用いながら被造物における比喩的言語使用とアナロギア的言語使用とを説明してみることで、両者の相違点を明らかにすることが出来た。それは「述語付けられている名が表示する内容に、その名自体が含まれているかどうか」というものである。比喩的な言語使用の場合、名は一方から他方へと、何らかの形相的類似関係に基づき転用されたものであ

る。それゆえ、例えば「笑う」という名それ自体にとっては「草原が花咲くこと」は本性的内容ではなく、そこに「笑う」が含まれてもいないように、名と事物の懐念が直接に結びつくことはないのである。しかしアナログ的な言語使用の場合、名と事物の懐念とは直接結びついている。それは「健康」という名が、薬の懐念である「動物の健康を原因する」に含まれていることから明らかかなようにである。つまり「健康」という名は、それ自体の本性的内容として薬の懐念を表示する訳ではないが、薬と動物の懐念は「健康」という点で関係を有しており、その「健康」という関係のゆえに薬に「健康」が述語付けられている、ということになるのである。こうしたことが両者の相違を生む一つの要因と言えるだろう²²⁾。

最後に、比喩的言語使用における恣意性について触れておきたい。例えば、もし或る人物が、人間と草原の類似関係を「人間は食べる時美しい」と「草原は花咲く時美しい」という点で見出したとするならば、「食べる」という名を両者に述語付けて、両者に類似している美しさを表示するようを用いることも十分可能である（その際「草原は食べる」と表現される）。しかしアナログ的な言語使用では、名が懐念自体に含まれているので、そうしたことは出来ない。このように、類似関係を見出す点によって述語付けする名が多様であり得るということは、比喩的な言語使用における恣意性として認められるものであろう。それと比較すると、アナログ的な言語使用は類似関係の見出し方に何らかの合理性があることになり、より限定的な言語使用であると言えるだろう。

以上までの検討により、被造物におけるアナログ的な言語使用と比喩的言語使用の相違点について、一般化する形でその一端を示し得た。これを以て小論を閉じたい。

22) 本稿の結論と McNerny (1996) における結論は内容的に近い。それゆえ比喩的言語使用の図式に関しては、神への比喩的言語使用の場合でも同じ仕方で当てはめることが出来ると思われるが、紙幅の関係上、詳細な検討は今後の課題とする。